

巻 頭 言

草の週間を迎えて

蔵 知 毅

例年の行事ながら今年も亦秋の草の週間がやって来た。この運動も始まってからもう10年以上になる。草を目の敵にしてやって来た日本農業に、草を新しい作物として取り入れていく運動であるから、5年10年やったからといって大きな顔はできない。外国の草作り運動は200年、300年の歴史を持っているのである。何代も何代も親から子に、子から孫に伝えられて来た運動である。日本ではまだやっと始まったばかりである。今の子供達が大人になり、その又子供が大人になる頃でなければ、日本の草は改良されないであろうし、草地農業も成功しないかも知れない。草作りなんて地味な仕事は、気長にやるより他はないので、ゆっくりやるのがよい。草の週間だけでなく、機会ある毎にP、R、していくべきであろう。

草と云えば雑草しか知らない人が多い。草にも長く伸びるものがあれば、地を這うものがある。採草地に向くものあれば、牧草地にむく草もある。芝生に使う草もあるわけである。用途に従って使い分けをすれば、草も活用できるものである。

自然草地を愛する気持ちも判らないことはないが、改良草地の美しさも味わってほしいものである。国土の狭い日本では一寸の土地も大切なのである。利用出来る土地は大いに活用して、草地農業をやりたいものである。

ニュージーランドは最も草生改良の進んだ国である。都市を中心に利用出来る範囲は全部牧草地にして家畜を飼い、その外側に植林をしているのである。従って道路の側まで全部牧草化されて、雑草は1本も見ることができないほどである。子供達も牧草試験場へ行って熱心に牧草の講義を聞いているのである。子供の時に教えられたことは終生忘れるものではない。吾々も将来の日本のために、先ず小学校の子供達から教育して行きたいものである。そのために学校でも協力して頂いて、学校に牧草の見本図位

を作って頂きたいと思う。

又日本には草の技術者が居ない。最近になって2～3の大学で草の講座を持つ様になったが、少なくとも農学部のある大学では、必ず草の講座を持ち、どしどし技術者を送り出して欲しいものである。

目下日本は登山ブームで、この夏は何処の山も満員の盛況である。ハイカー達もただ山に登るのみでなく、少し位は草の研究をすると共に、登山記念に牧草の種子でも播いてくれたら、もっと山が美しくなるかも知れないし、草の改良に役立つかも知れない。

草はもう雑草ではなくて、作物になったのである。もう一度草に対する認識を新にしたいものである。